

特集

看護学における 事例研究法の進化

質的記述的事例研究法の可能性

看護学における事例研究法への関心が、高まる一方である。2013年に企画した「看護学における事例研究法——新しい研究デザインの可能性」(46巻2号)では非常に多くの方々から声をかけられ、事例研究法のもつ現実的な可能性の大きさを感じた。本特集は、そこからさらに発展的に先に進めるものである。

今日の私たちは、多様な研究手法を手に行っているにもかかわらず、現実における看護実践の成り立ちを見極め、そこから看護のあり方を問い、深く考える「手立て」というものを見失っているのではなかろうか。現代に生きる私たち人間にとって看護とは何であるのか、看護はどのようにあることが求められているかを深く考えようとするとき、私たちは原点に立とうとし、そのときに求めるのが、現実の事例である。

看護学における事例研究法の意義について Anthony, & Jack (2009) は、「事例研究法は、専門的に関心のある事象を記述し、説明し、理解あるいは評価でき、多くの看護文脈に用いることができ、健康領域及び社会福祉領域の事象を調べる方法論としてよく受け入れられ、看護に関する知識の発展を促進するために活用が可能である」と指摘している。「いのち」に関わりながら人々を支えようとするとき、求められるのは万人共通のケアではなく、それぞれの複雑性を緻密に捉え、TaylorMadeでケアを創生する思考である。だからこそ、実践を積み重ねてよりよい看護を追求し、現実のものとしてきた看護職の多くが、事例研究法に未来を見ているのである。いま、私たちが事例研究法に真摯に取り組むのであれば、長軸的時間とともに積み上げてきた看護実践の知と技(わざ)を、目に見えるかたちで豊かに継承していくことができるはずである。

・ Anthony, S., & Jack, S. (2009). Qualitative case study methodology in nursing research: An integrative review. *Journal of advanced Nursing*, 65 (6), 1171-1181.

企画：黒江ゆり子(岐阜県立看護大学・大学院教授)